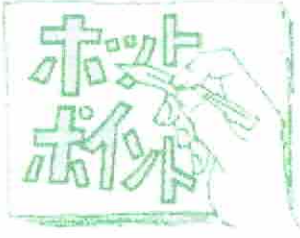

変わる江戸時代の歴史認識

明治維新とは一体何だったのかを問う本が、最近、売れ筋となっている。これと連動するものではないが、近世、江戸時代の農業・農村についての研究も変わりつつある▼これまでは「小農経営」や「地主制」「百姓一揆」などをキーワードに、否定し解体すべき封建的な村であることを前提に研究・分析が行われてきた。ところが「私たちに確かにつながるご先祖様であり、今日の基礎を築いた江戸時代の百姓たちの暮らしを振り返る」立場から、もしくは「独自の価値を持つ別個の世界としてこの社会を眺める立場への移行」等からの見直しが進みつつある▼これによって明らかにされてきた一つが土地の所有関係である。今日のような、一つの土地の所有者は単一ではなく、百姓・村・同族団・領主など複数の人および集団が、重層的に関係していたとする。共同所有と個別所有とが重なり合った所有形態となっており、だからこそ個別の百姓が困窮しても、村としてこれを援助してきた。そして村の百姓がまとまって協力することで、経営規模の小さい百姓でも経営の存続が可能になった。また儲かるからといって先祖伝来の土地と農業を捨てるのではなく、農業とそれ以外の諸生業とを組み合わせて経営を維持・発展する道を選んできた、等々▼こうしてみると、江戸時代も現在と共通する本質的問題に直面しており、こうした中であえて先祖は小農経営を選択して、これを発展させてきたと見ることもできる。海外等の事例に学ぶことも大事であるが、歴史を振り返って考えてみることは必須だ。

（土着菌）